1989年度

交野市埋蔵文化財発掘調査概要

1990.3

交野市教育委員会

例　言

1．本書は、交野市教育委員会が、平成元年度国庫補助事業として実施した交野市内における埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は、交野市教育委員会が実施し、社会教育課の奥野和夫が担当した。

3．本書の作成及び遺物の整理にあたっては、斉藤登美子、真鍋成史氏の協力を得た。

4．調査の実施に際しては、大中俊文、船吉仙旬、西中薗修、嶋澤泰彦、竹内毅、仲西功夫、真鍋成史、富松大、須田將昭諸氏の協力を得た。

はしがき

交野市は、大阪府の東北部に位置し、京都府と奈良県とに境界をなしています。このように古代の中心地として栄えた地域に隣接するという地理的環境から市内には数多くの古代遺跡が存在しています。

私達の祖先が残したこれらの貴重な文化遺産を守るため、本市では長年にわたりあらゆる努力を続けてまいりましたが、近隣の他市の例にもれず、本市におきましても開発の波が押し寄せ、このために以前にも増して文化財保護に対する必要性が生じています。

このような大事な時期を迎えまして本市教育委員会におきましても条例・規則等の法律面での整備及び調査体制の充実を計る等、文化財保護行政の強化に努めておりますが、必しも十分であるとは言えないのが現状でございます。

つきましては、今後とも、文化財の保護に対する皆様方のより一層の御理解、御協力を賜りますようお願い申し上げますと共に、今回の調査に際して御教示又は御協力をいただいた方々に深く感謝の意を表するしだいであります。

交野市教育長 伊　藤　史　朗

交野市の位置図

目　次

例　言
はしがき

第１章　1989年度交野市内遺跡群発掘調査概要……1

第２章　交野郡衙跡遺跡発掘調査報告……1
　第１節　遺跡の位置と環境……1
　第２節　調査の概要……3
　　(1)　位　置……3
　　(2)　層　序……4
　　(3)　遺　構……5
　　(4)　遺　物……6
　　(5)　まとめ……7

第３章　布懸遺跡発掘調査報告……8
　第１節　遺跡の位置と環境……8
　第２節　調査の概要……9
　　(1)　位　置……9
　　(2)　層　序……10
　　(3)　遺　構……10
　　(4)　遺　物……11
　　(5)　まとめ……11

挿　図　目　次

第１図　1989年度交野市内発掘調査位置図……2
第２図　調査地位置図(1)……3
第３図　調査地位置図(2)……3
第４図　調査地断面実測図……4
第５図　調査地遺構平面実測図……5
第６図　出土遺物実測図……7
第７図　調査地位置図(1)……8
第８図　調査地位置図(2)……9
第９図　調査地断面実測図……10

表　目　次

第１表　1989年度発掘調査一覧表……1

第１章　1989年度交野市内遺跡群発掘調査概要

交野市教育委員会では、平成２年２月10日現在に至るまでに４件の補助事業にかかる発掘調査を実施した。

本年度の発掘調査状況を前年度と比較すると、建築確認申請及び文化財保護法第57条の２及び３による届出件数についてはほぼ同数であるが、補助対象にかかる分については、前年度の６件に対し４件であった。

今回の調査では、個々の調査面積の狭小にもかかわらず、調査地における当時の地形及び集落の範囲並びに文献との適合について成果を得た。

以上、交野市教育委員会が国庫補助事業にて実施した調査については以下の一覧表のとおりである。

表１　1989年度発掘調査一覧表

調査区	遺跡名	申請者	所在地	面積(㎡)	備考
1	森	向井喜久次	交野市森南 1丁目296－1	501.67	2m×1mのトレンチを設定し、地表下1.2mまで掘り下げる。遺物・遺構なし。
2	郡津	中西守	交野市郡津 1丁目379の一部	170.50	本紙１ページ
3	東倉治	福山喜久	東倉治３丁目 2099	472.98	3.5m×1.6mと1.6m×1.6mのトレンチを設定。それぞれ地表下２mと1.5mまで掘り下げる。砂層が続き、遺物・遺構なし。
4	布懸	石田嘉信	星田７丁目2658－１及び－２	389.20	本紙８ページ

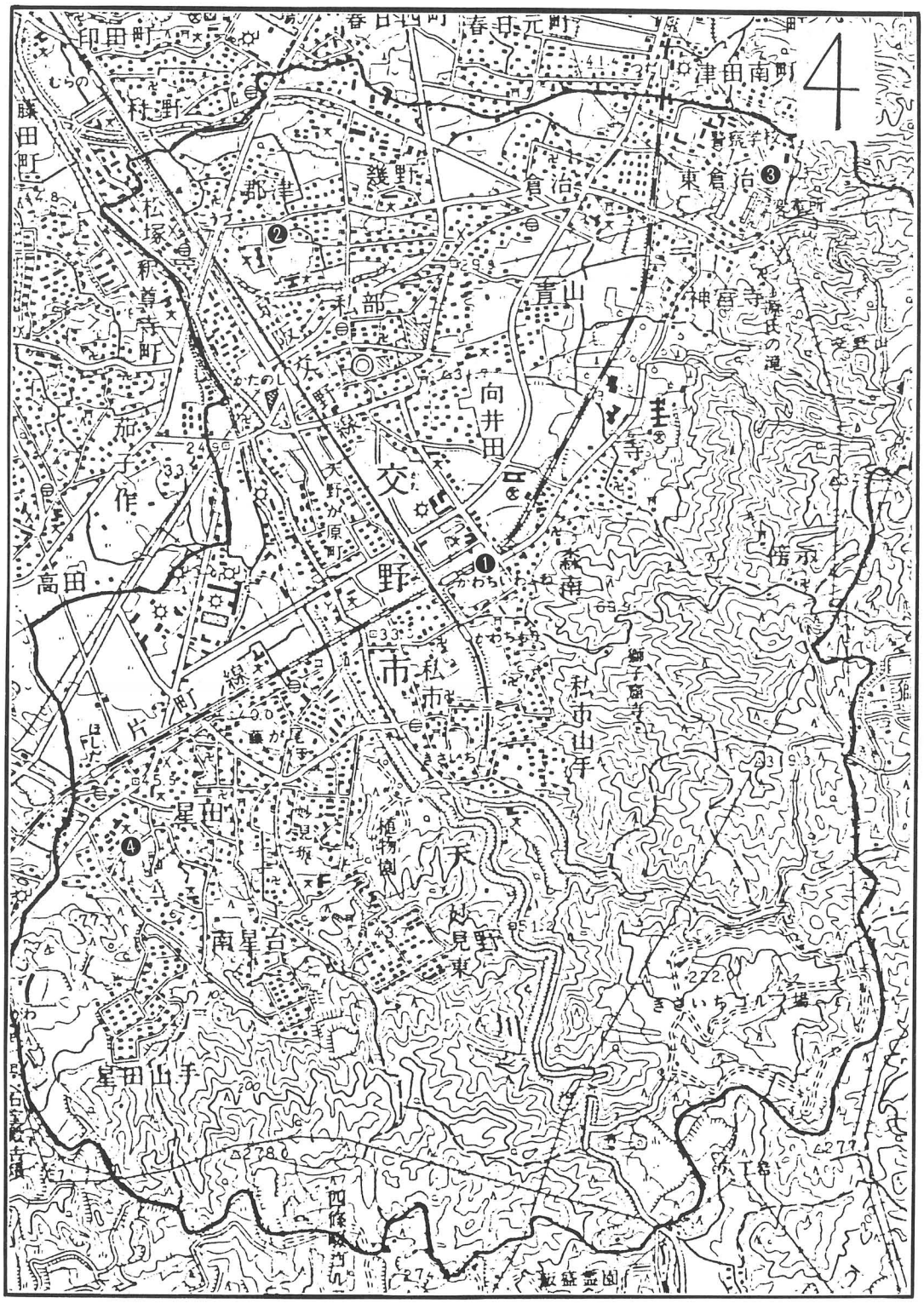
第２章　交野郡衙跡遺跡発掘調査報告

第１節　遺跡の位置と環境

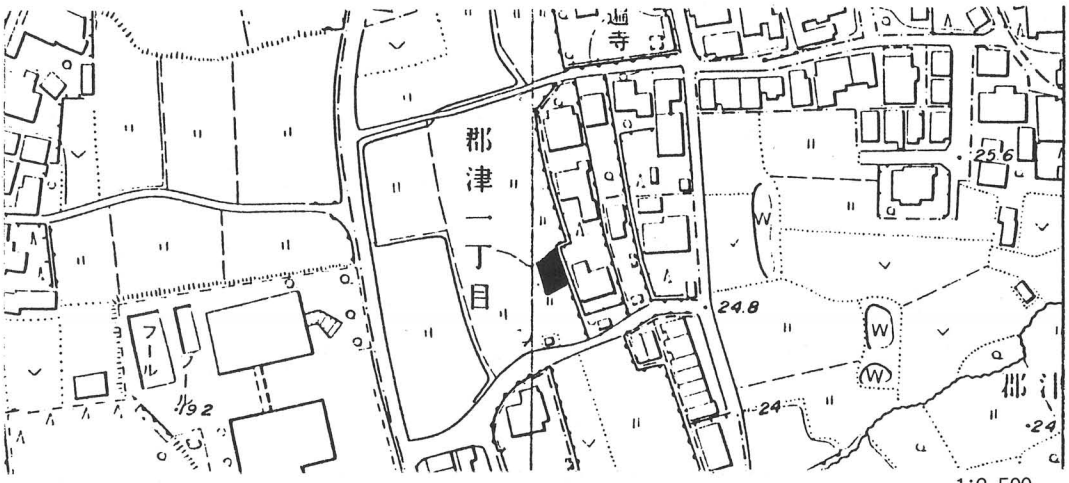
交野郡衙跡遺跡は、奈良県に源をはっし淀川に注ぐ天野川の低湿地帯を望む交野市郡津の台地部とその付近に存在したと想定されている。

同遺跡の範囲内には、弥生時代後期のハセデ遺跡や渋り遺跡の他、丸山古墳などの古墳が存在する。又、天野川を隔てた対岸の枚方市側の丘陵部には藤田山古墳をはじめとする数多くの遺跡が存在する。

尚、最近の調査の結果から、この地域に存在したとされている古代条里制を否定する遺構等が検出され、このため条里制の中心にあたる所に位置していたとされる郡衙についても疑義が生じており、今後の調査の結果が期待される。



第１図　1989年度交野市内発掘調査位置図



第2図　調査地位置図(1)

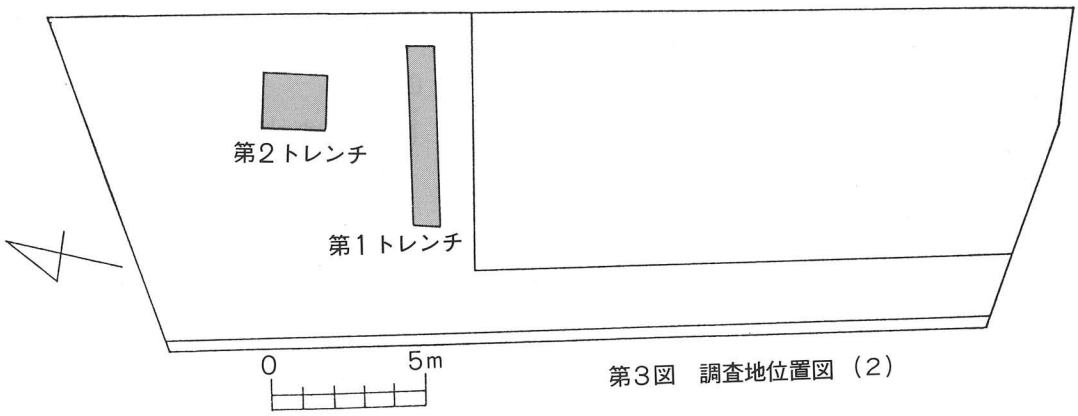
第2節　調査の概要

(1) 位　　置

今回の調査地は、交野市郡津1丁目379番地内に所在し、前年度の補助事業にて実施した所（同377番地）から南へ僅か40m 程離れた所に位置する。

同調査地の東側は、生駒山系の山麓部から続く台地の先端部分で、同位置とは、約3ｍの高度差を呈し、一方西側部分は天の川付近の低地部（標高17m）へ向ってしだいに低くなっている。標高は21.0m である。

調査は、東西6ｍ、南北1ｍとその北側に東西2ｍ、南北1.8m のトレンチを設定し、調査を実施した。

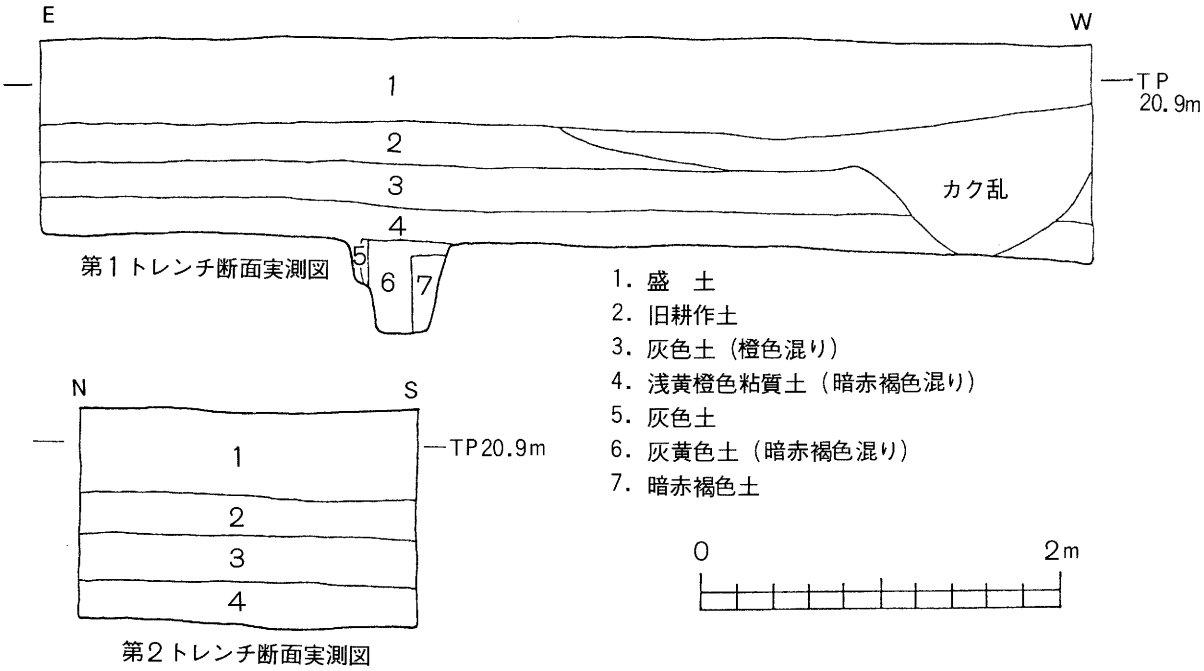


第3図　調査地位置図（2）

(2) 層　　序

層序については、第１、２トレンチとも同様な層序を形成する。第１層は盛土である。第２・３層は、旧耕作土層で、第２層はその表土部分である。第４層は暗赤褐色混じりの遺物包含層で、第３層表土下40cmに厚さ約20cmの巾にて堆積する。ベース面は同377番地と同様、この地域に分布する黄色粘土質の地山となる。

第１トレンチの西側部分は、部分的に遺構面までがごく最近にかく乱された形跡がみられる。又、遺物包含層である第４層には、古墳時代から中世に至る遺物が混入していたが、柱穴部分の第６層は古墳時代の遺物のみで、中世以降の遺物は全く検出されなかった。

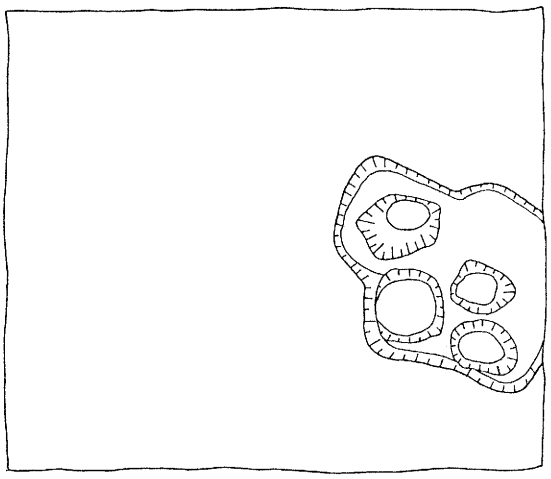


第４図　調査地断面実測図

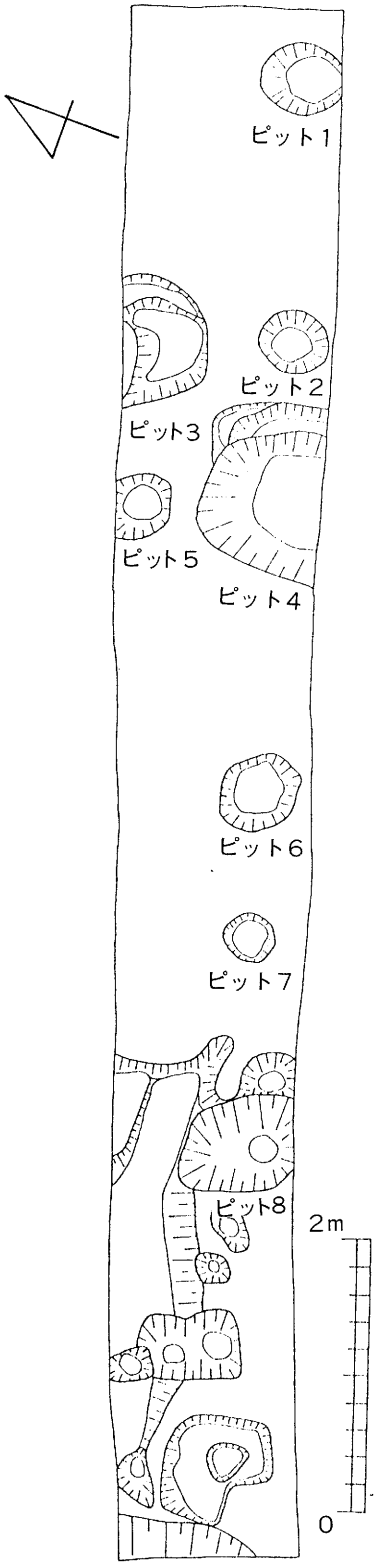
(3) 遺　　構

第１トレンチからは、建物もしくは柵に伴なうものと思われるピット群を検出した。ピットはトレンチとほぼ同方向に沿った形で並び、これらの大きさは径15cmから25cm、深さ10cmから51cmを測る。ピット内から出土した遺物により、これらのピットの時期を古墳時代後期と鎌倉時代初期の二時期に分けることができる。

第２トレンチからも第１トレンチと同様ピットを検出した。ピットの数は4つで径15cmから25cm、深さ21cmから49cmを測る。各ピットの時期差は確認できなかったが、これらのピットからは瓦器、土師器等は出土しておらず時期的な隔たりは小さく、第１トレンチのピット４と同時期の古墳時代後期と推定される。



第２トレンチ



第１トレンチ

第５図　調査地遺構平面実測図

(4) 遺　　物

今回の調査地からの出土遺物としては、須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・フイゴの羽口・鉄滓等を出土した。

1は須恵器の杯蓋（身）である。復元口径12.0cm、残存器高2.6cmを測る。立ち上がりは内傾してのび端部は丸い。受部は水平にのび端部は丸い。内外面とも回転ナデを施す。胎土は1mm以下の砂粒を多量に含む。色調は内面が灰白色（N 7/）、外面は灰色（N 6/）を呈する。焼成はやや良好である。（第2トレンチ出土）

2は須恵器の壺である。復元口径15.2cm、残存器高5.5cmを測る。口頸部は口頸基部より外弯してのびた後、口縁部で再度外方にひらき、口縁端部は丸い。内外面とも回転ナデを施す。胎土は密である。色調は内面が灰白色（N 7/）、外面は灰白色（N 8/）を呈する。焼成は不良である。（第2トレンチ出土）

3は土師器の甕である。復元口径は10.2cm、残存器高は4.3cmを測る。口頸部は口頸基部より外方にひらき、口縁端部は平端である。内面の口縁部はナデ、体部は剝落不明、外面はナデである。胎土は1～2mm以下の砂粒を多量に含む。色調は内外面とも灰黄色（2.5Y 7/ 2）を呈する。焼成はやや良好である。（第2トレンチ出土）

4は瓦器椀である。復元口径は15.6cm、器高は5.8cmを測る。体部は丸味をもって立ち上がり内面端部に沈線を有す。底部には断面三角形に近い高台を付している。内面の暗文は、細くて密なものと太くてやや疎のものとがある。見込みには連結輪状の暗文を施す。胎土は精良である。色調は内面は灰色（N 6/）、外面は灰白色（N 7/）を呈する。焼成は良好である。（第1トレンチ出土）

5は瓦器皿である。復元口径は9.2cm、残存器高は1.5cmを測る。底部は、わずかに丸味をもつが平坦であり、体部は外反してのび、内面には鋸歯状の暗文を施している。胎土はやや密である。色調は内面は灰色（N 6/）、外面は灰白色（N 7/）を呈する。焼成は良好である。（第1トレンチ出土）

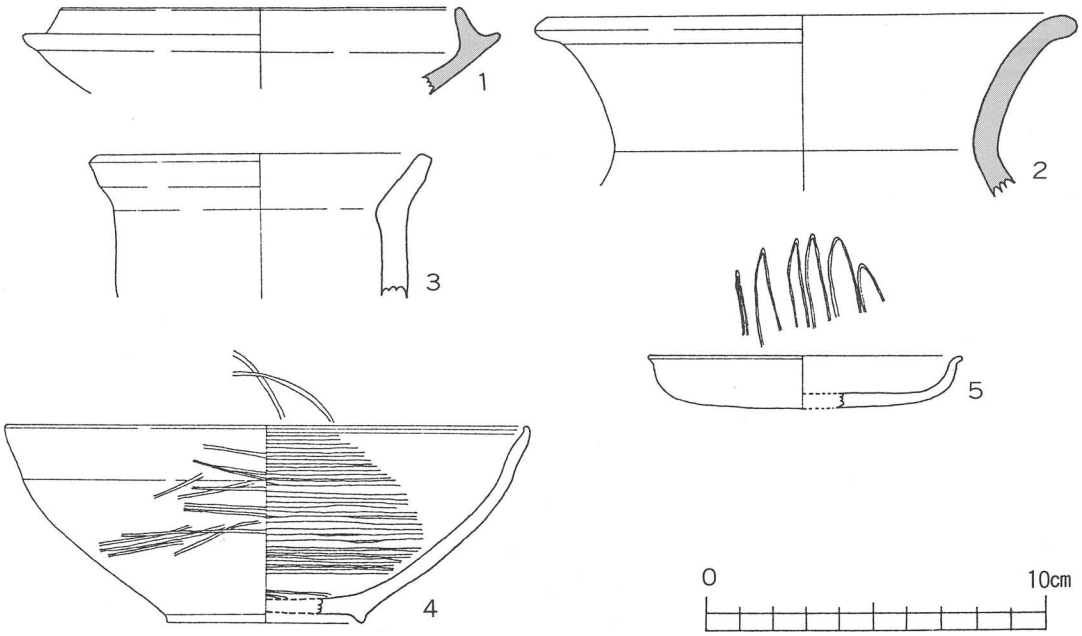
6はフイゴの羽口である。破片であって詳しいことは不明であるが、外面に火を受けた跡が認められる。胎土は3mm以下の砂粒を多量に含む。色調は内面は橙色（5YR 6/ 8）、外面は浅黄色（2.5Y 7/ 3）を呈する。焼成は二次焼成のため不明である。（第2トレンチ出土）

7は鉄滓である。3個体があり、合計60g である。（第2トレンチ出土）

(5) ま と め

今回の調査では、古墳時代後期の柱穴が検出され、その中からフイゴの羽口・鉄滓が出土したことにより、天野川上流の森遺跡と同様に鍛冶生産が行なわれていたことが確認できた。また、鎌倉時代の柱穴も合わせて検出し、郡津周辺において中世集落の存在が予想される。しかし、今回も白鳳期の長宝寺に関連する遺構・遺物を確認することはできなかった。

トレンチでの発掘調査のため遺構・遺物に関して詳細に述べれなかったが、古墳時代と鎌倉時代の交野の歴史を考える上で、狭少な調査面積に反し、貴重な成果を上げたものと思われる。



第6図　出土遺物実測図

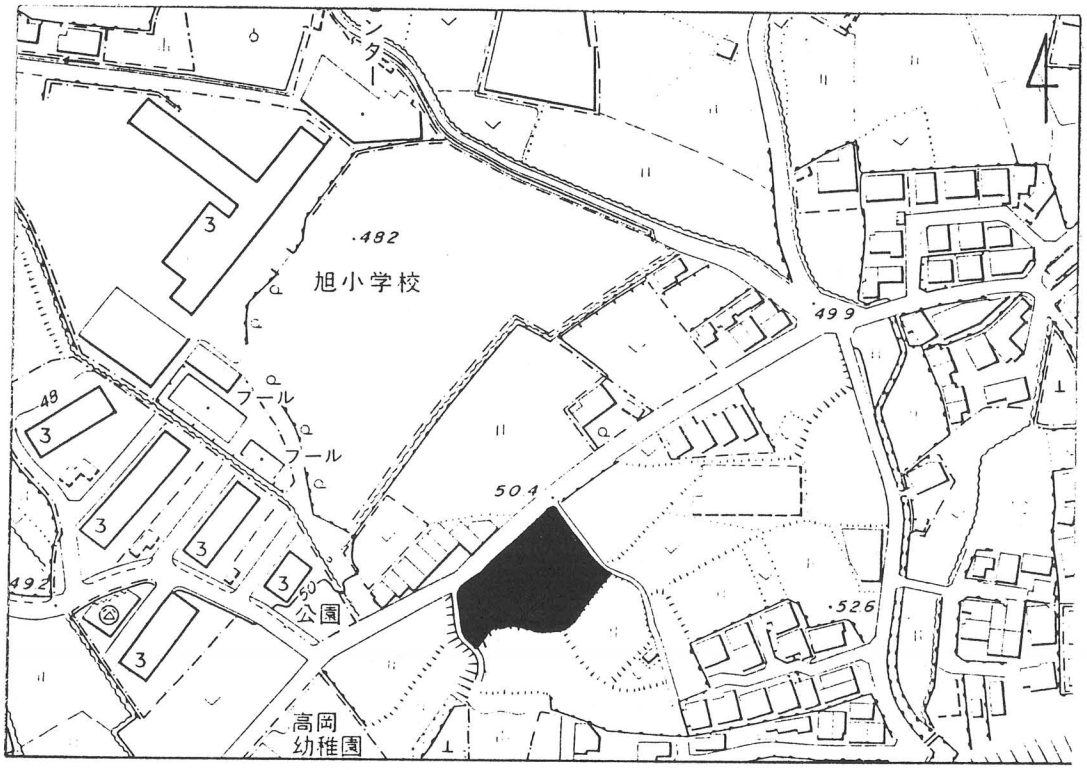
第３章　布懸（のうかけ）遺跡発掘調査報告

第１節　遺跡の位置と環境

交野市南西部の星田に位置する布懸遺跡は、ＮＴＴの社宅を建設する際、ナイフ形石器４点を含む後期旧石器時代や縄文時代を含む中・近世の遺物が出土し、遺跡の存在が確認されたものである。

同遺跡は、生駒山系の北側斜面から派生する尾根筋の丘陵が切れた地点の標高50m前後のところに立地し、西側には傍示川が流れ、ほぼ寝屋川市との市境になっている。付近の遺跡としては「キャリパー式土器」と呼ばれる縄文時代中期の土器を出土した星田旭遺跡、弥生時代後期の遺跡である坊領遺跡、古墳時代前期の古墳である妙見山古墳、平安末期の文献に記された星田牧の跡と推定される外殿垣内（とうのがいと）遺跡など数多くの遺跡が存在している。[註1]

註１　久保弘幸「大阪府交野市・星田布懸遺跡出土の石器「(『旧石器考古学』27　1983年)



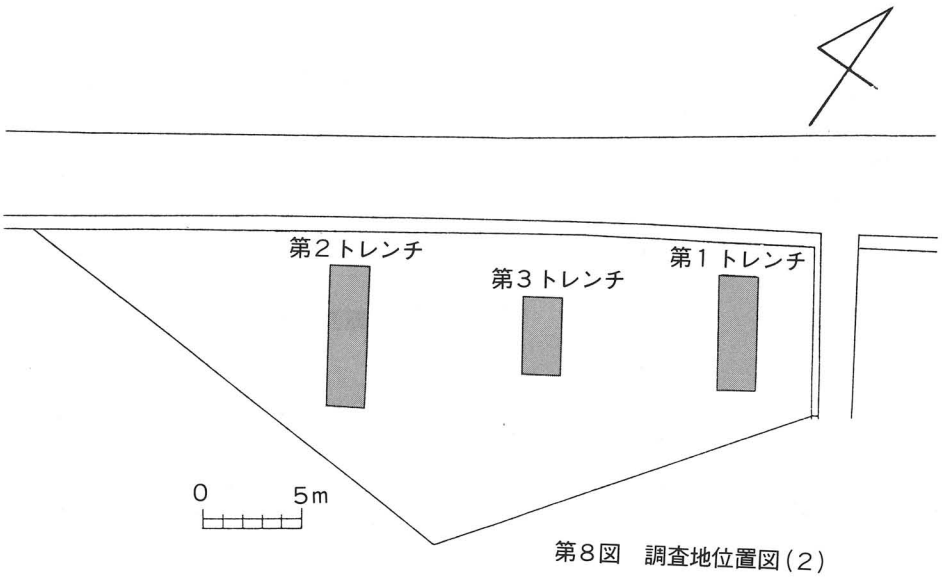
第７図　調査地位置図（１）　　1:2.500

第２節　調査の概要

(1) 位　　置

今回の調査地は、布懸遺跡の東端と推定されるところで、生駒山系から派生した尾根筋の切れたところにあたり、北側には市立旭小学校があり、又少し離れて西側には傍示川が流れている。地番は交野市星田７丁目2658番地で、標高は50.7m である。

調査は、調査地をほぼ南北に走る形で、東側から順に６ｍ×２ｍ（第１トレンチ)、４ｍ×２ｍ（第３トレンチ)、７ｍ×２ｍ（第２トレンチ）の３本のトレンチを設定して調査を実施した。

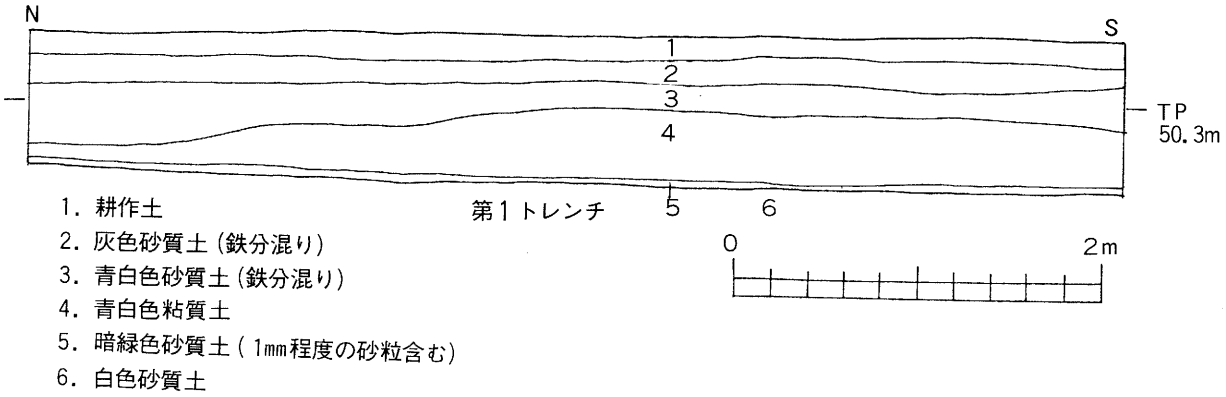


第８図　調査地位置図（２）

(2) 層　　序

層序については、各トレンチとも同様の層序を形成する。第1層は盛土である。第2層は灰色砂質土で、第3層は鉄分混じりの砂質土である。第4層は青灰色粘質土である。その下層に厚さ約3cm程で、少量の遺物を含む暗緑色砂質土の第5層が存在する。第6層は、花崗岩質の白色砂質土で、地表下0.8mを測る。

層序からして、第3層までは、現在の耕作面を造る際に他の場所から運んできたもので、出土遺物から近世以降であることは確実であり、又、第5層についても出土遺物から判断して、上層とはそう時代的な隔たりはないものと推定される。



第9図　調査地断面実測図

(3) 遺　　構

今回の調査では、遺構を検出することはできなかったが、第5層面については木片等の出土遺物の状態から、同調査地の山側にある星田大池の決壊の痕跡（安政二年）によるものと推測できる。

(4) 遺　　物

本調査区から出土した遺物は破片がほとんどであり、実測図などを提示することはできないが、各包含層より近世後期の陶磁器瓦を出土した。陶器としては唐津焼の碗・磁器としては染付の碗がある。

(5) ま と め

今回の調査では、石器が出土したとされている地点（同地西側児童公園内）から、わずかしか隔たりがないにもかかわらず石器等の有史以前の遺物は全く検出できなかった。

しかし、調査面積の関係から確実なことは言えないが、星田山中に存在した廃小松寺（奈良時代～江戸時代）の縁起文や、江戸時代の星田の古地図にも記されているような、古代から近世に至るまでの星田周辺の地勢（異国のような荒山）を今回の調査からもうかがえるようである。

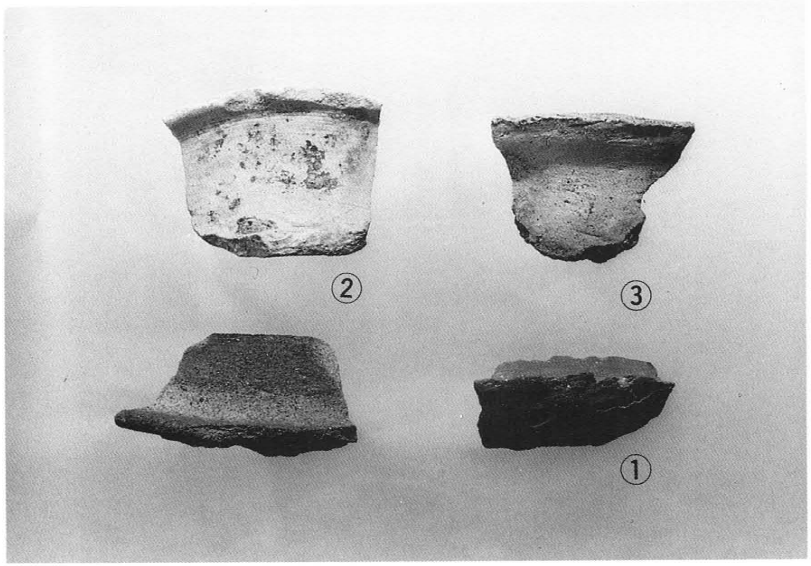
図　　版

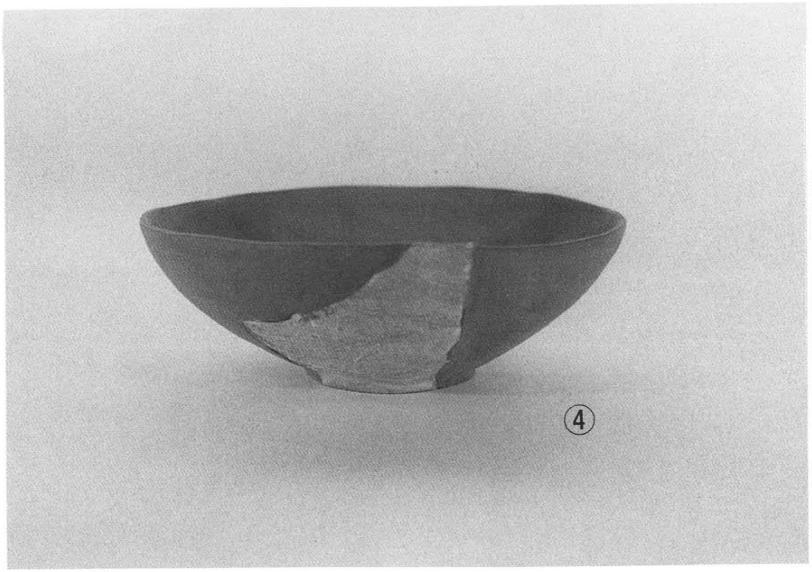
第１トレンチ　（交野郡衙跡）

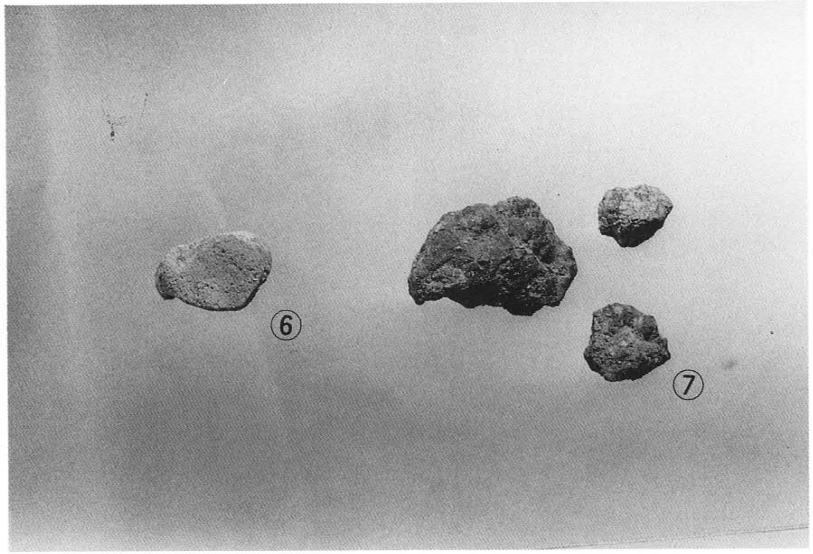
（交野郡衙跡）

第１トレンチ(右上Ｐ４)　(交野郡衙跡)

出土遺物　(交野郡衙跡)



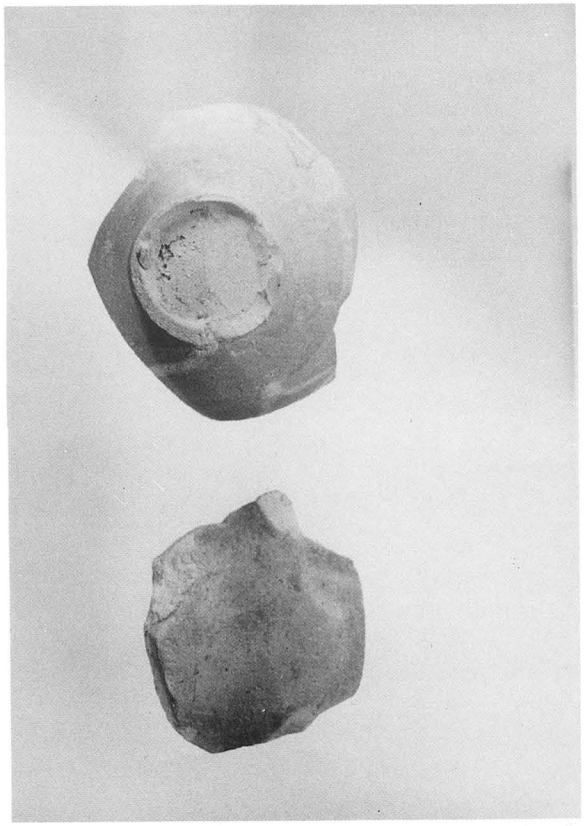




出 土 遺 物

（交野郡衙跡）

第１トレンチ（旧耕作痕）　（布　懸）



出　土　遺　物　（布　懸）